日の当たる門

小川未明

青空文庫

きかん坊主の三ちゃんが、良ちゃんや、達ちゃんや、あや子さんや、とめ子さんや、そのほかのものを引きつれて、日の当たっている門のところへやってきました。

「学校ごっこをしようや、さあ、ここへならんで。」と、三ちゃんは命令をしました。けれど、みんなは、まだ学校へ上がっていないので、よく字を知っておりません。

「気をつけ、番号！」

「一、二、三、四っ、五、六、七っ。」

「さあ、まる書け。」

三ちゃんは、ポケットから、白墨を出して、塀に大きなまるを書きました。白墨を持っている子供たちは、めいめい門の上へ、またあちらの塀の上へ、まるを書きましたが、白墨を持っていない子供たちは、ぬかるみのどろんこの中へ棒を入れて、きれいに洗ってある門の前の石畳の上へ、土でまるを書きました。三ちゃんは、みんなの書いたまるをひととおりながめて、さも満足したように、

「うん。」と、うなずきました。

「こんどは、なんにしよう?」

「唱歌だ。あいこく行進曲をうたおう。」

みんなは、声をあわせてうたいました。

「見よ、東海の空あけて、きょく日高くかがやけば、天地の正気はつらつと、希望はおどる大八島……。」

「もういい。あや子さんが、いちばんうまい。達ちゃんはだめ。」と、三ちゃんが、点をつけました。

「僕、もっとうまく歌えるやい。」と、達ちゃんは、不平をいいました。

「こんなこと、もうよしたーと。」と、一人が、叫びました。

「だめ、こんどあっちへいくんだ。原っぱへいって、戦争ごっこをするんだ。気をつけ、前へ！」

三ちゃんは、号令をかけました。そして、自分が、いちばん先頭に立って、テンテンテ、テンテンテ、トテトテト――と、口でらっぱのまねをして、威張っていきました。その後から、みんながついて、あちらの横町の方へまがって見えなくなってしまいました。

ちょうど、そのじぶん、門のある家のお勝手もとのガラス戸が、ガラ、ガラとあく音がしたのです。ほおと両手を赤くした女中が、お使いにいこうとして、門のところまでくるとびっくりしました。

「まあ、どこのわるい子供だろう、こんないたずらをして。」と、しばらく立って、あっけにとられながら、門の上や、石畳の面や、塀に書かれた白い丸や、どろんこの丸を見つめていました。

この家のおじいさんが口やかましいので、毎朝、女中さんは、つめたいのをがまんして、門をふいたり、石畳をゴシゴシとたわしで、みがくのでありました。女中さんは、お使いから帰ったら、またおそうじをやりなおすうえに、塀までふかなければならぬかと思うと、がっかりしてしまったのです。

「このへんには、ほんとうに、わるい子がたくさんいるとみえて、いやになってしまう。」と、ひとり、口の中で、ぶつぶついいながら、出かけていきました。

この通りは、先が止まっているので、あまり人が歩きませんでした。それを幸いにして、また天気のいい日は、朝から、昼すぎまで、日がよく当たるので、子供たちの遊び場となっていました。

「勇ちゃん、しっかりお投げよ。」と、敏ちゃんは、ポン、ポンとグラブをたたいていました。

「よし、いい球を出すよ。」と、こんどは、勇ちゃんの強く投げ出したボールは、敏ちゃんのグラブの中に、ボーンといって、うまくおさまりました。

　そのうちに、あっ、という勇ちゃんの声がしたかと思うと、球はねらいをはずれて、ドシンと大きな音をして、板塀にうちあたったのです。二人は、いっしょにくびをすくめました。そして、顔を見あって笑いました。

「おじいさんがしかるよ。」と、そばで見ていたよし子さんが、いいました。

「しかったら、よすよ。」と、勇ちゃんが、いいました。

「勇ちゃん、いまのはすべったんだ。もっと強くたっていいよ。」と、敏夫は、元気でありました。

「このボールがいけないんだね。」

　二度めに塀へ球があたったときは、板を破りそうな音をたてました。すると、門のところへおじいさんが出てきました。

「おい、子供、あっちへいってやれ、門燈をこわすと大事だ。ここは人のとおる道で、ボールを投げて遊ぶ場所でない。こんど、塀にあたるとゆるさないぞ。」と、おじいさんは、いいました。おじいさんのひっこむのを見ると、敏ちゃんが、

「塀にあたるとゆるさないって、どうするんだろうね。こんなくさった塀がなんだい。」と、いって、ボールを投げつけるまねをしました。

「原っぱへいこうか？」

「ああ、いこう。」

　敏ちゃんは、手に持っているボールを高く空へ上げて、自分でうけとっていましたが、どうしたはずみにか、ボールは門の内へ落ちて、あちらへころころと、ころがっていきました。

「エヘン。」と、おじいさんの咳ばらいがしました。女中が、なにかおじいさんに話している声がきこえます。

「いうことをきかなかったら、とりあげてしまえばいいのだ。」

「ほんとうに、この近所には、いたずら子が多うございます。」

　勇ちゃんと、敏ちゃんとは、舌を出していました。よし子さんは、笑っていました。

「ボールが入ったから、こちらへ投げておくれ。」と、敏ちゃんが、いいました。門の内から、なんの返答もありません。勇ちゃんは、しゃがんで、門の下のすきまからのぞくと、ボールは山茶花の木の根もとのあたりにころがっていました。

「さおを持ってこようか。」と、敏ちゃんがいいました。

「あちらへ、ころがってしまわないかな。」

「よし子さん、取ってきてくれない。」と、勇ちゃんがたのみました。

「いやよ。」と、よし子さんは目を大きくみはりました。

「困ったなあ。」

「みんな内へ入ったら、僕とってくるから。」

　そのうちに、女中もいなくなるし、おじいさんも、庭の方へいったようです。勇ちゃんは、門のわきについている扉をおすと、チリン、チリンとけたたましく鈴がなりましたが、彼はすばやく内へかけ込んで、ボールを拾うと、また走って門の外へ出ました。扉を

しめるときに、力をいれて引いたので、チリ、チリ、チリンという音が、けたたましくしました。

「さあ、原っぱへいこう。」

たちまち、子供らの姿は、ここから見えなくなってしまいました。

＊　＊　＊　＊

その翌日もいい天気でした。この門のところには、朝早くから日が当たっていたのです。

炭屋の小僧さんが、塀によりかかって、ぼんやりとひなたぼっこをしていました。夜の間に降りた霜柱が、日の光をうけて、しだいにとけています。敷石の上は乾いているが、土の上をふむと足の跡がつきました。

「もう、得意をまわったのか、早いなあ。」と、そこへやってきたのは、同じ年ごろの酒屋の小僧さんでありました。

「寒くてしようがないや。」

「そんなに肥っていても寒いかなあ。」

「ばかいっていらあ、おまえは寒くないか。」と、炭屋の小僧さんが、いいました。

「相撲とろうか、おまえは強そうだな。」と、酒屋の小僧さんが、いいました。

「おまえとなら、負けやしない。」

「じゃ、こい！」

「よしきた。」

二人の小僧さんは、日の当たる前の石畳の上で、たがいに押しあい、もみ合いしていました。うん、うん、というようなり声がきこえたのです。梅の盆栽を縁側において、ながめていたおじいさんは、小僧さんたちのうなり声をきいて、なんだろうと思いました。

「また、うちの門のところで騒いでいる。あすこは、よく日が当たるものだから、いいことにして、みんなあすこへきて、塀によりかかって、きれいにしておく石の上をよごしてしまう。どれ、ひとつどなってやろうか。」

おじいさんは、わざと勝手もとから、門の方へまわりました。そして、塀についている節穴から、外のようすをのぞいて見ました。すると、いま二人の小僧さんが顔を真っ赤にして、たがいに負けまいとして取り組んでいる最中でした。

「ははあ、やっているぞ。」と、おじいさんは、しかることを忘れてしまって、じっと、どちらが勝つか、負けるか、見とれていました。

「そうだ、そうだ、もうひと押しだ。」と、おじいさんは、自分でも力んでいました。そして、心に、五十年も昔に友だちと相撲をとったことを思い起こしたのです。

「そうだ、そうだ、うん、どちらもなかなか強いぞ。」と、口の中で、おじいさんは、いっていました。

二人の小僧さんは、どちらも力があって、いい勝負だったが、炭屋の小僧さんのほうが肥っているだけに体力がつづくとみえて、酒屋の小僧さんはへとへとになって、石畳の上へ倒れてしまいました。

「やっぱり、おれは弱いなあ。」と、酒屋の小僧さんはため息をつきながら、悲観しました。おじいさんは、

「なんだ、そんないくじがないことでどうする。もう一番やってみろ。」と、心の中で、叫びました。

「どれ、もう一度やろうか。」と、酒屋の小僧さんは、立ち上がりました。けれど、こんどは、なんの苦もなく、炭屋の小僧さんに、たたきつけられてしまいました。

「おまえなんか、いくらかかってもだめさ。」と、炭屋の小僧さんは、威張りました。酒屋の小僧さんは、いかにもくやしそうです。これから、毎朝道であっても、炭屋の小僧さんに頭が上がらないと思うと、残念でたまりません。

「おい、もう一度やろう、今度負けたら、降参するよ。」と、酒屋の小僧さんは、いいました。おじいさんは、

「そうだ、その意気だ、しっかりやれ。」と、心の中で、酒屋の小僧さんに応援しながら、塀の節穴から目をはなしませんでした。

「いいか、今度負けたら降参するんだぜ。」

「いいとも。」

二人は、たがいににらみあって、白い息をはあはあやっていましたが、酒屋の小僧さんは、弾丸のように、相手の胸へ飛び込んでいきました。二人の顔が、たちまち真っ赤になりました。さあ、今度こそ大相撲です。一人は肥って力は余っているし、一人は、負ければ恥になるだけでなく、いよいよ降参しなければなりません。どうしても負けられない一番です。見ているおじいさんまでが、苦しくなってきました。

「うん。」

「うーん。」

二人は、うなりつづけて、組み合ったまま押したり、押し返したりして、相手のすきをねらっていました。

「うーん。」と、おじいさんもうなって、自分までが相撲をとるような気持ちでいました。ちょうど、そこへ女中が、

「また、あすこへきて、石畳の上をよごしている。」と、口ごとをいいながら、お勝手もとから出てくると、おじいさんは、手でこちらへきてはならぬと追い返しました。なんといっても、酒屋の小僧さんは、いっしょうけんめいです。うん、うん、炭屋の小僧さんを押していましたが、炭屋の小僧さんは、よくこらえていました。

「もうひと息。」と、おじいさんが、いったと同時に、酒屋の小僧さんがここぞと押した力に、炭屋の小僧さんはどっと仰向きに倒されて、ミシ、ミシといって、塀の板はこわれました。酒屋の小僧さんは、勝った喜びもどこへやら、急に顔の色を変えて、倒れた炭屋の小僧さんと、こわれた塀とを見くらべましたが、

「よし、よし、塀なんか、かまわない。おもしろかったよ。」と、おじいさんが、ふいに門の外へ出ましたので、二人の小僧さんは、二度びっくりして、おじいさんに、いくたびも頭をペコペコ下げて、いってしまいました。

「ああ、子供は元気でいいなあ。」と、おじいさんは、空を見上げました。そのおじいさんの顔を見て、太陽は、にっこりと笑いました。それからおじいさんは、子供が家の前へきて遊んでも、しからなくなったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　12」講談社
1977（昭和52）年10月10日第1刷発行
1982（昭和57）年9月10日第5刷発行
底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社
1940（昭和15）年8月
※表題は底本では、「日《ひ》の当《あ》たる門《もん》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年8月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日の当たる門

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/